夢をかなえる努力

八南小・5　荒木　紬希

私には夢がない。夢をあきらめたからだ。でも、努力をし続ければ、私だっていつか夢をかなえることができるのかもしれない。

詩音は小学四年生の女の子。ある日友達に、「夢はないの？」と聞かれ、詩音は考えこんでしまった。私の夢ってなんだろう？と。

私も友達に夢のことを聞かれたら、詩音のように考えこんでしまうだろう。詩音と一緒で、夢がないからだ。私の小さいころの夢はパティシエだった。ショーケースにならぶ色とりどりのケーキを見て、私もこんなケーキを作りたいと思ったからだ。しかし、その夢はあきらめてしまった。なぜかというと、私は料理が苦手だからだ。何か作ろうとすると、いつももたもたしてしまう。たまごの黄身がわれたり、キッチンが道具でごちゃごちゃになったり。こんな私がパティシエになるのは、きっと無理だ、と思うようになった。

でも、詩音のおばあちゃんであるちるるは、七十五才で音楽コンクールに出場するために、ピアノの練習をがんばることを決め、やりきった。私は、まだやり始めてもいないのに、自信を無くしてあきらめている。ちるると同じように、私も料理の手伝いやかたづけをがんばって続けていれば、いずれ料理が得意になるのかもしれない。

世の中には、私の知らない仕事がたくさんある。私が知っているのは、身近な大人の仕事や、見聞きして知った仕事にかぎられている。先日、東京に行ったとき、観光スポットで、外国の方に英語で案内をしている人がいた。英語を使う仕事は、今までほん訳家と英語の先生くらいだと思っていたけれど、他にもたくさんあると気づいた。もしかしたら、パティシエだって、ケーキ屋さんやレストランで働くだけでなく、他にも私の知らないパティシエに関連した仕事が、いくつもあるのかもしれない。知識を増やしたり、経験を積んだりすることも、夢へ近づく一歩なんだと思う。自信を無くさず進んでいけば、私には可能性がたくさんあるのだ。

（あせらず、今できることを精一杯やっていくんだ。そして、見つけたら、それをたまごのように温めていく。いつか、きっと、美しい姿でかえることを信じて。）

詩音のこの言葉は、私へ向けた応えんメッセージのように感じた。詩音は、ピアノの発表会のために努力したちるるを見習って、こう思ったんだと思う。私も詩音を見習わなければならない。あきらめたらそこで終わり。あきらめなければ、いろんな道が見つかるのではないかと思うように、変わらなければならない。

大人になってどんな仕事につくのか、今はわからない。だけど、夢をかなえる努力をし続ければ、いつか自分の理想である姿にたどりつく。私はそう信じたい。そして、そんなしょう来になるように、私も今から、努力を続けていきたい。大人になって、その努力が実るように。